

條理餘譚

矢野 弘

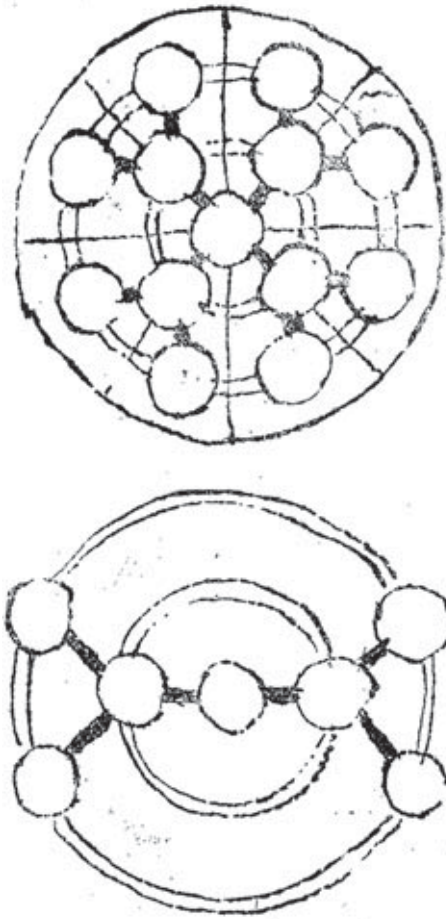
○玄語は天地を説き、贅語は天人を語り、敢語は堯舜周孔の道を説く、三語の撰次各異也。仍て三語を合て梅園全書と云はんも可也。

○我熟々古人の著書を見るに、精覈該博ならざるに非ず。然ども議論偏隘にして早く自己の門戸を張らんとする者多し。然らざれば洗洋として迂誕に渉る。我條理よりして見る時は欲然なきこと不能。我先生の学を見るに、三語の外の著書には但條理に拠たる斗にて、深く其理を説きたることなし。まして国字などにて人の解しやすき様に書きたるはさらさら無之也。余力固陋を以て先生の趣意をはかるに、三語をとくと読み、自箇の工夫を下して條理を探る程の人ならでは、其道を伝えるに不足もし、津々として口舌に任せ、凡唐人に解せしめんとするは、勞して益なしとのことなるべし。此に一の話あり。向に一の高僧あり、不殺生を説く。一富家の女、功德の為に衆僧の衣を濯んことを望む。然るに衆僧の衣蟣蝨の多集たる故、沸湯にて洗んは如何と思ひ煩ひ、彼老僧に問しかば、老僧しばし打案じて、其蟣蝨も久く経堂にして尊き経文を聴たれば、沸湯にて殺したりとも何の妨げかあるべきと答られしと也。此等は婦女の類にも餘りに深く不殺生を戒めたる故、かかる問答もいでくる也。我力の及ばぬ所の道はたとひ尋問たりとも、却て迷の種子となるべし。孔門の弟子の仁を問ひ孝を問ふにも、其方箇様に行へ、其方は箇様にせよと指揮し玉ひ、人々にて其言の異なるも此

意ならんか。只天地の是非を取舎し、天地の大道を行ふこそ大人の志なるべけれ、瑣々として偏隘へんあいの道を立てるは一家の説と云うべし、大道とは云ふべからず。然れども人は妄惑の念深き故、賢となく愚となく、我一生安心の巢窟を得んことを求めるもの也。是小道の世に行れ易き所以也。今匹夫匹婦の浮屠ふとによく親むは、安心の巢窟を手早く得れば也。然れども其説の天下に一統せざる時に識者出で其説を打破すれば也。我よりして見る時は安心の巢窟を得るも不得も、同く天地の大道を行はざることを得ざれば、実に是人情を得るの好消マと云ふべし。天地の大道と云は即三語の本旨なれば此に云ふべきことに非ず。

○條理を学ぶ時は古の道も不用のことに様に思ふ人もあるべけれど、夫は大なる誤り也。條理は我一是非を以て他の一是非をせめ、百家と共に守禦区画して一家を立てるの比にあらず。天地の條理を正して、百家を取舎し、天地の化育を助くべきことは其本意也。衣食を以て之を言ふに、衣食は本飢寒の為に設けざれども、国々にて其制度各異なるは此亦然らざるを得ざるの勢也。必しも彼此を争ふべからず。故に人は先我ます本国の制度に従ひ、さて其上にて他邦の制度をも取舎すべし、是天下に通ずるの道也。若我習むし氣じつに牽ひかれ、本国制度の外は忌み嫌ひ、又は新奇を好み、本国を背き他邦に随ふは何とか見識ある様なれども、皆我所好このむところに淫すると云ふべし。近比京師ちかしやうに碁を好む人あり。然れども其子には碁を教へず。人其故を問ひしに、我は碁の道理を以て万事に推わたして用ゆ。今我子に碁を教へたりとも、我ほどは碁を用に立得まじきと思ふ故也と答へきと。此人は能よ近く譬を取ると云つべし。若人ありて、碁にも人道を備へたりと云はば此則家学すなわちに淫する也。古より百家の説多けれども、或は世を憂へ、或は一家の門戸を張り、我好尚に淫し、時習にうつされ其説を設けたる故、時うつり事去て後に此を見る時は兎角天地に合し難し、是三語の由て作れる所以也。

○三語は世に所謂博物窮理の書に非ず、條理を説かんが為に古典事物を引用せり。先生本事物の理を甚だ研



究せり。我十四五の時諸童子と鳩の声をかぞへ居たりしに、先生来りて鳩は七つより多くは鳴かずといへり。外貌は閑暇なれども其中の経営甚だつとめたり。三語中には平生研究千の一も載せずと見へたり。古典も多くは、正き書中に正きことと見たるばかり少しづつ條理發明の為に引用せり、初学博物窮理の思をなすは非也。○玄語は條理学の根本なれば、此語に通ぜざれば贅〔語〕敢〔語〕の骨体を探ること不能、寓意は僅に数十章なれども甚だよく條理を發揮せり、此も玄〔語〕に通ぜざれば其体貌を得ること難し。

○図を見に法あり、大抵上を天とし、下を地とし、右を陽とし、左を陰とす。大円は混成也。小円は祭立也。黒系理の剖析て反比を示す。双系円は剖析の位置を正し、直系は剖析を明かにす、此其大較也。凡そ理は上下剖析して貫徹す。然れども理の往く処に随て体性も亦異なる也。一歳中に冬夏あるが如し。寒極れば氷雪を結び、

暑きはまれば雷電を発し其体性を変ず。又人身に就ていふに、人身の表は皮を纏ひて、内体を保たんとして外物に接す。皮は一なれども諸体にしたがつて、用を異にし各々一境を分別せり、此黒系の小図をつづる所以也。此外図法に変化あれどもこの理を会得せば思ひ半に過ぐべし。○凡そ條理の道に統散あり。古人の言はざるところは已むことを不得して新名を不立ことを得ず。男女を合して人と云う



こと、古より有之とも、天地水火を合するの統名なき故に、天地を合して体と云ひ、水火を合して性と云ふ。贅語身生帙かくのこしきに如此図あり、経脈の本名、心肝より出る白系赤系を指して云ふ。経は膏体にして陽とす。脈は血体にして陰とす。今此図は膜上の経脈、膜下の網脈を対合するの統名なき故、経脈の字を取て経脈を合して経と云ひ、網脈を合して脈と云ふ。膈腸えん亦同。読者此義を不知ば、図書共に名実混淆して竟に曉さとるべからず、此類甚はなはだ広し。枚挙し難き故露部を読む時は、露境に入て天地を盡し、没部を読む時は没境に入て天地を盡し、然して後天地の本体を会取すべし。此観物の法にして三語を読むの大要領也。案するに、古書にも此法なきに非ずと云へども、但條理を立ざるのみ、仁聖の字の如き、古は処に随て義を異にす、此擬議の道にして古今同然。

○條理は新説にして一家の学に似たれども、甚はなはだ広大にして其津涯を知る

べからず。梅園先生平日の言行詩文、或は門人教授の道、皆條理によると雖、人其條理たることを不知、此理言行の大小詩文の巧拙にあづかることに非ず。詩轍愉婉録の著書の如き皆條理に折衷せり。門下の人も多くは其然るを不知、然るに今玄語を講釈して、世間凡庸の人に條理を曉さとさしめんと欲する者あり、是則條理を不知者の言也。嗚呼其人に非れば道虚く行はれず、我少年の時、甲州武田信玄のことを人々評判するを聞くに、信玄をば我同等の人の如く甚はなはだだ軽々しく之を論ぜり。後甲陽軍鑑をよむに、信玄の衆を御し兵を用る誠に絶世の豪傑也。其麾下の諸將も皆万夫の雄也。故に徂徠翁も馬場山形内藤高坂の人々をば殊に推重せり。今の世に生れし武事を鍛錬する人のかかる粗率の論あるいかにぞや。眼ある人は世に少きものと見へたり。夫條理は言がたきことに非ずといへども、玄語の深意は学問に涉り、旧習蔽はれざる人ならでは得て論ずべか

らず、況いわんや新学にして世の人いまだ條理の名をだに聞かざるをや。

○反觀と云ひ、天人と云ひ、是條理学第一の急務なり。之を知らざれば準繩得て立ちがたし、然しかれども一端にして曉諭あきらすべきに非ず。

○理と故と相對す。故とは俗に云ふわけと云ふこと也。理は昭々たる者也。故は冥々たるもの也。今人水は冷に火熱すると云ふにつき、種々の理を推して此を論ず。然しかれども何故に水は冷に何故に火は熱すると云ふ故は知るべからず。理を好まざる者は故を以て理を排し、好む者は理を以て故を掩ふ。共に理を得ざる者也。○理と氣との二つ分別すべし。氣あれば必ず理あれども、理ありて氣の必ず隨はざることあり。冬寒夏熱の氣は理を推て知るべし。然しかして夏雪冬雷是亦氣のなす所にして、理も亦隨はざることを得不得故に、理は氣中の理にして理より氣を生ずるに非ず。故に冬寒夏熱の理ばかりを推して冬雷夏雪の理を説くことあたわず、冬雷夏雪の氣を尋ねて而後其然しかる所以を知るべし、然しかる所以のもの則ち理也。又夏は人の熱を苦むことは是理の当然也。然しかれども疔おとりのを病む人は寒戦す。是平人の理を推すべからず。故に其病候を診して其氣を察し、寒の理を知べし。是理氣の別也。然しかるを冬寒夏熱も理と云ふ、冬雷夏雪も理と云ひて氣を言はざる時は、其理混雜して果ては人の笑となる。人理の氣中にあるを不知、但理を推すを好みて反觀に晦し。況いわんや理非の理を以て天地を包括せんとするは、所謂管中の一斑を窺て全貌を説くが如し。

○古より虚無を尚ぶ人ありて無万物の根元と云ふ。夫物は氣ありて而後体あり、有無は体中のことにして氣には有無を云ふべからず、今体中の有無を以て氣を説くは粗率と云ふべし。凡そ物生ずる則有、滅すれば則無、然しかれども氣は有、無すべからず。氣もなくして無と云ふもの物を生ずると云はば、枯木も花さき腐種も萌芽を發すべし。今喜怒睡覺は氣也。喜怒睡覺する者は無也といはば、人豈是を信ぜしや。有は無に對す、有を除けば

無も亦不可言。①如かくのごとく此相對すと云ふは是也。②如かくのごとく此無は有の母といはば非也。人の生少老化的ごとき次第に無より有を生ずるに以たるとも、夫は造化の通と云ものにて自_レ有_レ無_レ自_レ無_レ有とは云ふべし。相生すとは云ふべからず。有無を以て造化の底蘊を説くは支離に属す。

○物に貌と云ふことあり。貌とは世に云ふ様子境地など云ふに略近し。貌を得ざれば其物を盡すこと不能。故に人を知らんと欲せば、其人の幼壯老の境を考へ、富貴貧賤得意失意の境を考へ、内外の言行の境を考へ、其上にて黙坐して其人を想見れば、其人貌自_ら我眼前にあらはるる也。天地を觀るも亦然り。本神天神天地華液の境を夫々に能分別して、然る後天地の貌得て見るべし。人道を掘るにも先づ天人を分別し、百家の説を斟酌し然して後人道の貌得て見るべし、此貌を見るにも條理によらざれば其真を得ること難し。若條理によらずして、一跳して其真を得んと欲するは木に縁魚を求るの類なるべし。

○我始玄語を讀し時、漫然として其門を得ず。後稍頭緒を得るに当て欣然として寢食を廢すること多し。然れども但章句繁雜なるを覺ふ、其後初て其言の易簡にして、其中に広大精微を具することを悟り、此を讀毎にして其篇章の早く讀み終らんことを恐る。又其始は此語を讀みて百家の説を甚だ輕蔑するの意あり、其後論至て百家の書を能く尋繹するに非ざれば、此語の深意も亦盡しがたきを覺ふ。是我此學に志ありてより今に至るまでの次第也。是亦四十九年の非ならんかと思ふままに此に記して他日を待のみ。

○人は天を戴き地を踏み生死の間に遊ぶ。貴賤賢愚同じく此途を出ることあたわず。故に云ふ知焉不知不知焉不知或將為魯衛之政と、此徹底の理也。然も學問をなし道の真を得んと欲する者、中途にて却て僻見を生ずることあり。我嘗て譬喩を設て云ふ、今一つの大山あり、數里を隔てて此を望に峯巒溪谷一目瞭然として掌に指すが如し。是賢愚共同く天地の間にあそび、其より旨趣異なる処なきが如きの喩也因て其山の形勢の真を得んと欲して、山下に至るに及ては向

に瞭然たるもの何れの処なることを不知しらず、又山中に人に至ては一木一石に我眼を蔽はれ、歩武の間に東西位を易かへ、忙然として其往所を不知しらず。是學問に入て却て迷ひ多きの喩也。人道の多岐是より起るよりと可知。思ふに人はつとめて良師を択んで道を學ぶべし。因て其山中に室廬をかまへ、年月を経るままに、或は薪樵漁獵など次第に遊歴するにつきては、昔我数里をへだてて初て此山望みし時、何方に高き峯とみへしは此峯なるべし、何方に谷と見へしは此谷なるべしと、次第に發明して大方は昔望みし山の姿にかわらぬもの也。此學問自得の地也。此に囚て考るに奇説を好むは真儒に非ずと知べし。此我條理に由て少年の時より發明する処なれば、此に記し他日識者の断をまつ。

○言語文辞の道皆擬議の二つを不出いでず。孔子曰父在觀其父父没規其行三年無改於父之道可謂孝矣と、此公叔文子の父の臣と政とを不改あらためざるの章と相侶たり、賢明の君即位の始旧弊を改め新政を施すとは別のこと也。然るに世の人、孔子の言かくあれども、不善をば即時に改むべきこと也と、此章に就て議論を起す者あり。此は一向に言語の擬を知らぬ人也。かかる料簡の人に條理の道をいかほど説き聞せたりとも、一言一句性物の剖対ありて、擬議の变化無窮のものをいかでか解し得ることあらん、良に歎息すべし。

○玄語本宗天地篇に云ふ、往則從而送之、来則逆而迎之、高則登而望之、深則入而度之、竊竊乎疑宇宙者之為也と。條理の道は実測を主とすれども、切に鹵莽と穿鑿とを忌む。近比西洋の医書に、人身腠理より目に見へず蒸氣を發すると云ふ。又は乾燥の食物には口中の津液を費すなど云ふ。人々擊節して斯やうの事を知らねば人身の理は兕角言はれぬやうに思ふは、一を知て二を不知也。天問の理は人の智力にて窮盡するはならぬことなるべし。古来より世を逐て次第に新説の出来るを見れば、今より以後いかやうの新説出んも得てはかるべからず。然ればとて條理の大概は辨じ難きことにあらず。凡そ人身の氣と云ふも精麁ありて、其理剖析し盡すべからず。声色の聴視に於る、人ただ耳目に声色を受くるとのみ思へども、耳目も亦視聽の氣を發して声色を収む。故

に視聽久き時は耳目も亦勞す、是其徵也。

我思ふに、銅鏡のごときも、常に一匣中に蔽するものと常に遠境を照すものとは、鏡の壽の長短にかかはることもあるべけれど、我其徵を得ざれば此を言ふこと不能、日

月星辰も地より彼を見、彼よりも地をみるべし。光影の粗氣さゝるも、かく互に相交れば、天地間のもの相給資して氣交錯の態推量るべし。飲食も亦然り。人ただ飲食の精液を資して身を養ふと

云ふことを知りて、飲食も亦化成の氣を人より資すと云ふことを不知。人の理は外氣と交接するものなれども、室内に居るもの門外に出れば其氣豁然たり。山野に出れば又其より甚し。人但我氣のはれやかなる様

に思へども、其実は内氣を発するは外氣も亦入る、発収の氣相反して力均し。其精微の態を盡すことは人力の及ぶ所に非ず。人多食して精神惰り筋力懶なるは外氣勝れば也。精神爽に筋力健かなるは内氣旺すれば也。

凡そ天地の間に生ずる者、内氣と外氣と相和して其生をとげ、内氣少く外氣多きものは其生淡泊也。外氣少く内氣多き者は其生濃厚也。かく云へばとて物理は研究するがあししと云ふに非ず、我身混成に居て條理を繹

る是我道の要領也。物理研究のみを好めば我心夫に淫し天地の全体を知ることあたわず、高見に誇りて物理を忽略にするは、混成を知りて條理を繹することを不知也。人々三語を読みみて会得すべし。

○人の飲食は胃中に化して吾骨肉を糧ふは固然也。然れども胃囊より上下はただ飲食の道路とのみ思ふは非也。今人自分に飲食を調和煎烹して、其氣を鼻に呼喚すること久しき時は、其食を多く食ふこと不能、此に由て思ふに食道の upper 体は飲食の精氣を資し、胃囊は精液を資し、胴腸は鹿液を資すと見へたり。又水に游泳すれば絶て渴することなし。久旱 忽雨を得れば人水を飲むこと少し。又巴豆を手握れば瀉下することありときけり。此等を合して思ふに、人身は内外に種々の関門ありと雖も、精なる者よりして之を見る時は、内外に氣の出入すること布囊を水中に弄るが如しと見へたり。造物者の巧想見るべし。

○玄語に膀胱は上口なしと云り。西説は精微を盡す故に、膀胱上に細絡つたりたるを見て受口ありと云ふ。此等を疑ふ人あり、余思ふに小水もと鹿質也。鹿なるものの滲漉するは必其道路あるべし。然れども其道路

人目にて分ち難き故、腸胃に對して上口なしと云。医は、金鉄は地上の諸物に比すれば堅体にして水火を不漏然れども、寒熱の氣は透過する也。寒熱も麤氣なれば金鉄中に其道路なきこと不能、若は後世精巧の人ありて金鉄中に寒熱の氣の透過する道路を見出すことあらんも難知。然れども今の世に居て其精微を見出さずしては、金鉄の理はいわれぬと云ふことにはあるまじき也。金鉄は密質にして水火をもらさず、ただ実熱の氣は透過すと云て事たれり。举世多くは自家の家学に淫し其真を失ふ者比々皆然り。故に我独端坐して思を一氣に通し、然後條理を繹する時は万物皆我に備ると云ひしも虚語には非ずと悟りき。

○人の神は一身の英華にて心に根拠し頭に用をなし、翻て亦一身に遊戯す。此獨神のみに非ず。人は声色をうくるの性ある故に、其竅を耳目にひろく方寸の耳目のみ視聽をなすに非ず、一身の視聽なり。其餘準知すべし。若し器物の用を異にするが如くんば、諸体豈給資して一身の用なすことを得んや、生子豈父母の如く精神支体を具足することを得んや、此條理混糅の趣意也。故に日は天易の散じて天となること不能也。水は地陰の結で地となること不能也。万事如此融通せざれば混糅の條理を知ること難し。

○條理を繹ざれば只管に物理を研究したりしも物の貌得て知るべからず。夫天は乾燥清明にして地は潤湿濁暗也。天陽地陰に和して水燥の二つあり、水は冷にして湿ひ、燥は温にして燥く、互に相反して其用をなす。地上の万物皆水燥の中にせられて、水に魚龍藻樹あり燥に鳥獸草木ありて其造化の力相均し、是を燥と云ふと雖、天の清に及ばず、是を水と云ふと雖、地の濁に及ばず、是水燥の名の設くる所以也。然るに西人地衝面の氣の湿を帯ぶるを見て、是を霧環と云ふ。人は淡水の中に居、魚は濃水の中に居と云ふが如き、條理を不知者の言也。今海水は冷と雖、極寒に非ざれば其中に燥氣なきこと不能、此に由て魚は炎火の中にをるといはば、其言豈理ならんや、苟も如此は言語の條理分別せず、何の言ふべからざることかあらん、豈物貌を見るこ

とを得んや。

○前にも言ひし如く、條理学は幽微を研究せねばならぬと云ふことには非ず。人身に就て之を言ふに、耳目手足其外の諸体の如き、各人身の用をなすが為に設くるは造物者の巧也。今此に就て人身の條理を正す時は、人身の体貌自ら見べし。然るに鹵莽の人は、平常に目なれたることには心をも用ひず、西説の、目には玲瓏膜あり、耳には鼓膜ありなどと云を聞き、其新奇に驚き頻に此を讚嘆す。而して耳目手足の如き顯然たる造物の巧をば、目なれくる故にさして奇也とも思はぬ、如何ぞや、我有奇疾、去南則就北、抱奇不為奇、徒好聚訟、惡觀彼貌、且弗觀、豈能冀玄哉と此言能思ふべし。人多くは物理は但只管に研究すれば物の体貌自ら見るべしと思ふ、似て非なる言也。西人ほど奇巧を盡したるは世になれども、今其訳書を見るに但新奇を競ひ、言語に抑揚ありて妥貼ならず、豈能物貌を知ると云はんや。偏隘穿鑿の人は我一の発見を張本として、夫より枝葉を生じて一家の言をなす。故に医者の病を治するに或は寒を主とするあり、或は熱を主とするあり、療治に癖ありて、或は寒を主とし、或は熱を主とし、人々の得手不得手あるは尤なることなれども、我得手なる術を以て天下治病の道易んと思ふは非也。試に見よ、人身の病、何ぞ必ずしも熱ならん、何ぞ必ずしも寒ならん。人は人身の和適ありて若偏に走ることあれば必ず疾病を生ず、是婦人小兒も能知る所也。然るに豪傑の徒却て我私見を誇張して、凡庸人の眼を眩耀するを好む。是條理の世に明かならざる所以也。

○人は至て多智なる者故、其知を閉塞して使はざる時は、必ず人道の妨げを生ず。多智なるが故に古の聖王其心に本き、文武礼樂種々の技芸を設けて万民を教化す。此独国家の用に立んと欲するのみに非ず、人心を安んじ、人情の濫溢を鎮静せんが為也。故に才智多き人は、学問をもなして我才智を使ふべし。又才智乏き人は、平生人間の事に我十分を盡し、外にあまるほどの才智もなければ、学問をなさずとも何か苦しかるべき。人は

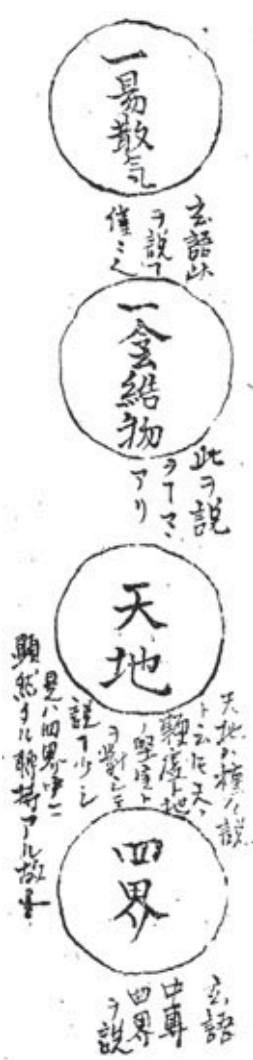
我が求る所をば得ると雖、我求めざる所をばいかでか我有となすべき。故に学問は用に立と思ふ人は用に立、用に立たずと思ふ人は用に立たせず、少し用に立と思ふ人は少し用に立、用不用共に疑しく思ふ人は一生を疑惑の中に送る也。是以人苟も我分を守り、我職を慎しまば天下の良民と云んも可也。人の能くせざる所を強るは大人の道に非ず。されど世には中人多くして、時勢と教とによりて善にも悪にも向ふものなれば、君師たるもの尤つつしむべきは政教の道也。世の中に大儒と称する人々、我門戸を張り互に相抵排して、理学を貴ぶ人あれば、理学はたわひも無きものと云人あり。和音を夷狄の音に近きと云ふ人あれば、和音は万国中に勝れたる音也と云人あり。如此は皆一家の説と云ふべし、大道とは云ふべからず。儒者は人を教る道を知る者なるに、如此同士軍のみしては、傍観する者いづれにか適従すべきや、皆是儒者の罪也。かく云ふ我も亦其中の一つならんかと思にぞ不覚筆を止て微笑を発しき。

○人は一芸に能達したれば、自餘の一事にも多くは聰慧なるもの也。若自餘の事に聰慧ならざる人は、其芸必ず未熟なるべしときけり。此論甚是也。人の学問も自得の樂地を経る人ならでは至道は論じ難し。若此境に至らざる人は、たとひ博洽にして百家の説をきはめたりとも、其学問皆門より入るの珍なるべし。如此人は或は倦怠を生じ、又は岐路に迷ひ、終身營々として樂地を不知、是皆胸中に根本なきによる。如此の人は譬ひ條理を学びたりとも何の益かあるべき。

○條理の言に散小天地と云ふことあり。夫人よりして観る時は、我より上なるものは虚氣にして精粗ありと云ふも、槩して之を天と云ひ、我より下なるものは実体にして堅軽ありと雖、槩して是を地と云ふ。是我大物にして天地の由て立所也。然れども物あれば氣あり、氣あれば物あり、氣物即天地なれば物として其大地あらざるはなし。是所謂散小天地也。故に日は日の天地あり、月は月の天地あり、星辰は星辰の各天地あり。是

よりして地上草木鳥獸に至る迄皆各其天地あり。肉中の蛆、樹上の寄生も各氣物を異にすれば、其天地も亦別也。然して大物の天地に統べられ、各々一中に居て感応網縊をなす。然して小物と雖、又能く大物と対して勢を張るもの也。人は小物也、なれど有意を以て天の無意に對す。有意無意に對すと雖も、しかも彼は衆大にして我は孤小也、故に有意を除けば無意も亦言ふべからず、わが大物の天地も能く思ひみれば陰也、小也、結也。大小共に得て窮盡すべからず。然れども今我虚天実地の際に立ち、仰ぎて氣西象東を見て天地の條理を説く、何の不可なることかあらん。然るに今西洋の地動の説をきき、其新奇に驚き、地動の論を知らざれば天地の條理得て説くべからずと思ふは偏隘也。若新説を知らざれば天地の理言ふべからずとせば、将来にかやうの新説あらんも知るべからず。箇様に思ひ回せば、万事口を閉ぢて言はざるにしかず。此理は玄語の図書を能く玩ぶ者に非ずんば得て云ふべからず。

○條理の言は典常を主として深理を後にす。今数條を此に記す。玄語中天地を説くをみるに、我新見を以てすれば塊々たる一陽散氣の中に一陰結物あり、結物をひらいて天地を見る、夫よりして四界を立つ是其次序也。右の如く條理あることを知るべし。さて又月は五星より小、されども月を微小に説きたること少く専ら日月



を並べ説く。五星は景中に居り、衆星は影中に居ると云ふを相對して説くこと甚はなはだ多けれども、日も衆星も影耀也と説くこと少し。五星は日陽の氣天陰を吸て、露を天間に結ぶとは多く説けども、五星与地類すと説くと甚はなはだ少し。日影水燥を相對して説けども、水燥を日影万分の一にも足ぬ様に説きたるは僅か也。日月の行には規矩を説くとも日月其形を塊にし、其行を岐にすと説きたることは少し。地は、大物と説くとも一小塊の如く説きたる処もあり。又此外に地は大物也と雖いへども、天の広大なる中に人界の如きもの幾つも有かと疑へば散小天地の説あり。地を天に對すれども、地球は餘り小也と思へば、小物も大物と勢を張と云ふことを説く。近ごろ西洋地動の説を委しく聞き、甚はなはだ新奇也と思へば、華液の説ありて其理を包括す。條理の言すべて如此なれば、此書を読まんと欲する者は、全部に通じて大小混糝多寡消息を比較せざれば、漫然たる鄙言累句の如くにして作者の意を得ること不能あたはず。

○前章の如く言はば、あまり理をむつかしく取廻したる様に思ふ人もあるべし。されどそれは物を深く考へざる故也。今若し水火の理を説かんと欲せば、相養の理を徹底に説き、相賊するの理を徹底に説き、相拒の理を徹底に説き、而後水火の本体得て言つべし。是偏を合して全となすの道也。若但いづく迄も平穩にして言語に偏なきやうに理を説かんとせば却て混淆に涉るべし。

○人は理を推すを好みて反觀にくらしと云は、今雨は雲より生ず、雲は地氣より生ず、雖しかりといへども然地水の其ままだに体性を変じて氣となり雲となり雨となる而已に非ず。皆造化細縷の力を仮れり、故に地氣は地氣の体性あり、雲は雲の体性あり、雨は雨の体性あり、しかるに理を推す者は雨は水なりと云ふ。其言是也。又其理を推して雲も水と云ふ。又地氣をも水と云へば其理混淆してむつかし。たとへば天地間の物水火の二氣をはなれず抔なご云ふ論を立てて論じつめたるときは、地氣を水と云わんも何か苦しかるべき。又仁は天地好生の徳と

云人あり、此も仁字を論じ詰めたる時などはさも云ふべし。仁とさへ云へばいつにても天地好生の徳と云て、仁字の訓詁のやうに云ひなすは偏也。是仁を餘りに深く思ひ過して天人を混じたる也。況や天地の間生化相半するをや。譬ひ博學多才其名天下を震動すとも天地の條理豈此をみたることを得んや。或問曰、中古天理の説出て今に至るまで是を推尊する者多し。然るに後世古聖の礼樂を主として天理の説を排する者ま亦有之。此両途いづれにか従ふべき。予此に答て曰、古来より人々聖人を推尊して六經を主張せり。されども時勢は世を逐て変するなれば、後世に至り古聖の礼樂盡くは循用し難し。因て古の礼樂をも取舍して當時に用ざることを不得、且人々の好尚ありて其旨趣各異なれり。此に依て我推尊する所の古聖礼學何とか滅裂したるやうになり行く也。仍て天理又は良知など云ふ説いで来りて、天より我に賦する所の物を本として、古聖礼樂もそれより推拈すと云ふこと起れり。然れども古聖の未だ曾て言はざることを主張して、古聖の極意なりと云ふに疑を生ずる人出来て又其説を打破する者あり。清の梅勿庵曆算全書に印度西洋の教をほぼ説けり。西洋回々も其初仏を尊信したれども、其後豪傑出でて人は人の祖師となるべきやうなして、天神を溟漠の中に設け其教一変せり。其後又豪傑の徒其説を排して聖人を以て道の祖とし其教へ再び変せりと云へり。蓋し深く思ひ詳に案ずるに、万国共に或は天神を祖師とし、或は聖人を祖師とするは人心第一の大疑と見へたり。仏教は禪を主として其説次第あるに似たれども、維摩經の不二法門首楞嚴の円通の如き、仏門高第の人にも各其説を異にせり。又朱子は學問を貴び陸子は徳性を貴ぶ、天下稻々其是非何の時にか定らんや。此は容易に論ずべきことに非ず、但學問をつとめなば其疑念自然に氷積すべしと答へき。世に條理を知る人あらざれば但如此答へけるまま記す。

○人は禽獸と性体稍類似せり。然れども意智甚だ巧にして情慾も亦此に随ひ至て深し。故に鳥獸の飲啄産乳

其性に任じて群を同うするとは大に異なる也。我を安しとすれば他を勞す、我を利せんとすれば他を損す。其至竟鬪事を致さざることを不得、故に叡聖の人輩出して之が君を立てて政令を掌り、之が師を設けて彝倫して道を明にす。故に君の政を仰ぎ師の教に循はざることを得ず。然れども世には異材強力の者ありて或は左道を執、或は干戈を動し良民の患害をなす者多し。是を以て君たる者は君臣之分を嚴にし、法令を明にし、兵衛を設け、良善を糧ひ、暴戾を禁じ以て斯民を治む。師たるもの学古今に達し、智宇宙を窮め、天人の道を明にして、異端の輩をして良民を迷惑せざらしむ。故に人の師たる者は天人の道を明にするを以て急務とす。今儒教は云ふに及ばず其他仏老及万国の教皆天人を明にするを以て至詣とせり。万国同く天人の道を講ずと雖、いえども 国風の風習俗態ありて其説同一ならず、彼此各其道を貴び争鬪の端此に因て起る傍通多可なれば其道駁雜也。一家の門を守れば其道偏隘也。彼此相争天下滔々として数千載の間竟に定論をきかず、此條理学の由て起る所以也。故に條理を学ぶの道六經諸子は云に及ばず、古今の史籍釈老及伊洛の書、西洋の窮理などに至る迄、一通り夫々の体面を会得せざれば條理も亦云がたし。此外平常人間の事、水火草木禽獸の類皆同く一天地間に綱縊せらるるものなれば、何れか條理学の一端にあらざらん。故云、人之為器也小不能以容惡推不能容惡之器冀天之党乎巳人之私于私也。若くは眼力此に及ばずして僅に我一是非を張り、目を瞋し臂を攘ふの徒は大に條理の道に背く。中才より以上はかやうにしても其道に自得することはあるべけれども、中才より以下は典籍を涉獵するに非れば其域に入ること難かるべし。然れども君子は其大なる者を識し小人は其小なる者を識すなれば一に云べからず。

○われ世の識者と称せらるる人を見るに、多くは二つの病あり。其一は自俗に異らんことを好み、其一は我道を世の中に早く広めんことを希ふ。此病を除くに非ざれば其身を安うすること難し。俗に異ならんとする

者は我道を高ぶり人を軽んじ、小人竟に道に向ふの途を失ひ、互に相激して禍端を興す、漢宋明党の事監むべし。又我道を世に早く弘めんとするときは種々の譬喩方便を運らして、心も至らぬ人に至道を早く合点させんとするもの也。此由未熟なる人々却て至道を取失ひ、遂には宋時道学の禁の如き事できて彼是共に世の笑となる。此二病学者知ずんばあるべからず。わが洞仙先生夙齡にして天地の條理を悟り、古来の学を發明し終に梅園三語数十万言を著述せり。玄語は條理の根本也。贅語は條理に拠て古今を論ずと雖、六帙諸訓の外は多通用の文章にしてさして條理ありとも見へず。敢語に至ては全部通用の文辞也。玄語を讀に非ざれば其中條理あることを知り難し。夫敢語は堯舜周孔の道よりして古今の間徳を積み仁を行ひ国家を治むるの大経を説けり。然して玄語中にある如き條理の言少しも概見せざるは何ぞや。誠に至道は広大にして容易に論じ難しと知べし。其餘の著書皆條理に折衷すると雖も、門下の人も其故を知る者少し。先生も亦始より不言、門下の人偶條理を学ぶ者ありと雖先生但大綱を説くのみにして、必しも卑く譬喩を設けて人を我道に引入ることを不好、是先生我道を人に伝ることを厭に非ず、誠に勞して功なく且は心の至らぬ人に如何に至道を言ひ聞せたりとも却て我道の妨となり、其人の為にもあしかりなんと上に云し二病なども思惟ありしなるべし。又條理学は天に法る故に其道はなはだ広大にして、初学の曉易きやうに教ゆべき道なし。若し強て云はんとすれば忽ち上の二病を生ず故、此道を学ばんとする者は勉めて聖賢の書をよみ、條理によつて天に徴するより外の術はあるまじき也。

○家庭指南の序批は先生の自作也。孟子五倫及び朱子小学を殊に推重せり。然れども、贅語に説くところと不同、此は有終先生に曲従するに非ず、古より條理の道を講明する人あらざれば是を以て人を責むべきに非ず。但條理の道にして天地含弘の徳也。故に家庭指南の本文を能解し、次に先生の條理によりたる序と批

とを参考し、其上にて死生帙倫類篇を読む時は其学の至大にして天に法のつとることを知る。初学よりして見る時は操守なきようにこそ思ふけれども、其実はかかる処より工夫を下す時は條理の捷徑しやうけいともなるべし。批語の内に懿徳いしとく即性と云ふ文あり、贅語に云ふところの性と異なれども贅語は天人の給資を説き、批語の懿徳いしとくとは圭角けいかくなきうるはしき忠孝の如き徳行を云ふ。うるはしき徳行は匹夫匹婦ひつふうひつふうと云へども愛敬せざるものなし。故に懿徳いしとくは即ち人の性質うまれつきの物也と云事也。天人を以て論ずるとは同じからざる処あり、今一を挙げて此を示すのみ。我向むかに條理の書を読み後、百家の中に是に相侶たる説ありやと、少年より今に至る迄之を採度するに、著者の体裁相似る者を見ず。然れども條理の議論百家に出入せざるものなし、或は古書を襲踏おそするに過るに似る者あり、然れども條理一貫の其体面は襲踏おそに非ず。凡そ條理は天地より物を観るを主とす。古来の載籍を達観するに聖人の教を以て典要とし、諸子釈老それぞれ皆夫々一家の学をなす。聖学に比すれば各遍不及あり、かくのかくのことき也。

○或ある問、人間の道は聖人を準繩じゆんじゆんとす、然るに條理学は古より聖賢のいわざる所也。故に今之を指て異端と云はんも可也。予答こたえて曰、此事條理を研究する人ならでは論じ難かたし。吾今試に儒学の一二を論ぜん。孟子は孔子を学ぶとは云へども性善王霸の辨わかまえ皆其新意也。宋朝の理学、天理人慾の説、大極図説、皇極經世書の如き亦皆其人々の新意を以て聖人の道を説く、是以其言各異也。試に看よ、古昔聖人と称する人此等の説あることなし。又聖人を刺説すれば老子莊子列子墨子の類也。後世に至晋人などは聖經に不満なる者多し。陸象山は論語中にも不是の処多しと云へり。司馬温公は孟子性善を用ひず、王荊公は春秋を斥け、王陽明は詩の国風を忌む。誠に人の見趣は無窮なる者也。以上の諸論千載並存して廢せず、何ぞ必ずしも條理を斥けて異端とし、此を廢置することを得んや。只其説の天に合すると天に合せざるとを以て此を看るべし。或ある又云、古来諸

儒は縦令誤はあるべけれども、何れも聖人の道によりて見誤りたる也。條理学は不然、我より古をなし規矩を
 立たりと見ゆ。然らば古来の諸儒と比較して云ひ難かるべし。答曰、古来の諸儒皆聖經によると雖、其
 所見種々ありて彼此氷炭をなすも世に少からず。夫六経の中艱晦深遠の処なきに非ずと云へども、中材より
 以上は一通り訓誥さへ通ずる時は、其体面解し難きに非ず。若不然して千載の下僅一二人ならでは通曉する
 者なしと云はば、六経みな解謎の類なるべし。聖人の教を設る恐くは如此ならず、是畢竟條理を知らざる
 による。若一たび條理を得る時は六経の旨趣瞭然として諸を掌に指すが如し。此事議論長ければ略す。
 ○向に一の医人あり問曰、條理を学ぶには仏をば屏棄するか又は其道にも用捨ある乎。予答曰、仏の條
 理に合すると合せざるとは姑く置き、古者聖人の民を治る猶赤子を保するが如しと云ひ、豈悌君子民之父母
 と云へり。夫赤子と雖是に教ゆるは義方を以てすべし、然れども大人の如く礼儀正く少も戲弄の事なきや
 うにとは教導なし難し。故に聖人の治は、愚夫愚婦の徒をも仁義礼楽の道に向はしむるものにして、仁義礼
 楽を天下の人に責むるに非ず。仏も今は四海の赤子を教育するの一端なれば、必ずしも截然として是非を加
 ふべからず。仏徒は自家の説を教化の一端とは思はず、教化の本源と思ふなるべし。故に種々
 とするは過也。又仏を以て四海の道を盡く易んと思も亦過也。文武の道すらも一偏を執ては国家の治を妨
 ぐ、況や仏老の類をや。又人は怪しき者にて眼前の顯然たることをばさし置き、ひたすらに高遠の道をつと
 むる僻あり。今重て其義を述べん。今子医を業とす、然れども子が習ふ所の医術古今不易と云ふにもあるま
 じ。又治病の術に内治外治安心検情道引の類其数多し。然れば子が業とする所の湯液は但治病の一端にこそ
 あれ、又子が平日人間に交接する所の礼儀、並に居宅作略衣食の制度、是亦古今不易とも云ふべからず。然る
 時は子が一身の中に定りて本源となるべきものは一箇も無之と見へたり。是等の処にも眼をつけずして但高

遠の道を而已論定せんとするは、譬へば田舎人の平日拝脆の礼にも習はずして、大嘗会の礼制を論定せんとするが如し。類を不知と云ふべし。たとひ至道を尋ね聞きたりとも、我胸中偏隘にして竟に天地條理の全体を得んことかたし。故に道に志す者は深く思ひ高く立ち其識見尤広大ならずんばあるべからず。

○総べて物には夫々の全体ありて、若し人其境界を会得せざれば其物につきて必ず誤りあるなり。小事を以て此を言ふに、仮令ば主人ありて客を饗せんに、其一座は其一座の境界ありて、主客共に口にこそ出し云はねども、各心々に会得の技芸を談じてよきもあり、平日の雑談によきもあり、早く座を立てよきもあり、寛やかに時刻を移してよきもあり、若人其境地に不類なるふるまいある時は、たとひ面白き事なりとも諸人快く思はぬもの也。此等の境地は誰も能く合点するなれども、最早君父に事へ民に長たる如きに至りては其全体甚見難し。況や天地間に至りては事物紛若目を眩せざるもの少し。是以古人水を陰とも陽とも云ひ、火を陽とも陰とも云は畢竟全体を見ざるより起る。已に其全体を見ざるが故に、孰が父子孰が夫婦孰が父祖なることを辨ぜず。一を言て二を略し二を学て一を遺る。傍觀する者其全体あやまることを知りて此を調停せんとすれども、天地の條理を得ざるが故に規矩をすてて方円を為るが如し。所謂非鼈足則五色之石にて誰有てか此を是正することを得んや。今條理学は天人の全体を見るが為の規矩準繩也。故に其門に入る時は目明かに耳聰に、天地間の事物朗然として黑白を辨ずるが如し。宗廟の美百官の富指摘して数ふべし、天地華液日影水燥本神天神と云ふが如き、皆條理開物の語也。反觀と云ひ氣物と云ふが如き、條理觀物喫緊の要領也。梅園門下の人は皆よく反觀の事を云ふと雖其実は容易に会得すべきに非ず。今世の人條理学を好まざるあり、其故は古来より数千載の間豪傑の徒未發明せざるの学を、只今眼前に田舎家の一翁此を發明すべきやうなし、定て僻見にてぞ有るらんと推度の言也。又條理をよき學術と云ふも先生平日德行あるを以ての故也。何れも

其学を知らざるは回事也。

○條理よりして古書を見れば、とかく少しづつの偏なる処ありて釈然たらざる者あり。此は條理の書に多く出たることなれど今一二を示す。孟子は滕の文公の如き小国の君にも王者の学を談じ、又程子論語礼楽の

(附記。私が原本とした写本では此処で切れている。今のところ『條理餘談』という書物は他には発見し得ないでいる。)

-
- 『梅園哲学入門』（一九四三年六月、第一刷、第一書房）所収。
 - 旧字は新字に改めた。
 - 読みやすさのために、適宜振り仮名を（現代仮名遣いで）つけた。
 - 底本はカタカナであるが、ひらがなに変えた。
 - PDF化にはL^AT_EX_{2_ε}でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。